

## ダンスにおける技術と学習内容に関する一考察

### A Remark on the Technique and Learning Program of Dance

体育教室 佐分利 育代

#### はじめに

学校におけるダンスが、既成作品習得から創作へと学習内容を転換したのは、1947年である。それから10年、ダンスにおいても系統性が追求され技術構造の明確化が試みられた。さらに10年、運動技術論と共に、ダンスは理念から方法論へと問題点を移行しながら指導法中心の技術論を展開した。今や、創作ダンスがとり入れられて30年、系統学習が唱えられて20年である。ダンスにとって具体的な指導論こそ必要な時期といえる。すなわち、「創作ダンスの基礎とは何か」さらに、「段階的な学習内容をいかに具体化するか」が明確にされるべきである。

この課題は、教育目標の中でダンスは何を教えられるかの問題に立返って考える時に明らかにされる。それは、教育目標の中でダンスは、手段的な価値を持つか目的的な価値を持つかの問題であり、ダンスが本来持っている、発見的、創造的な活動としての特殊性により論ずることができる。すなわち、ダンスは、その終結点が多様であるという特殊性と、表現媒体としての動きの体験自体に教育的価値を持たせるべきであるということである。したがって、ダンス学習指導の課題は、創作ダンスの本質的な体験<sup>\*1</sup>をどうしたらさせられるか、そのために何をどの位与えることができるのかにあるといえる。

本稿では、ダンスにおける技術の考察と、各学年での学習内容の考察を通して、より具体的なダンス学習指導の手がかりを得ることを目的とした。

#### I. ダンスにおける技術

##### (1) 芸術としてのダンスにおける技術

芸術の教育的価値は、行為とその経験においてみ出すことができる。ハーバート・リード<sup>2)</sup>は、審美教育の包括するものとして、①あらゆる知覚および感覚の自然の強度を保存すること、②諸種の知覚および感覚を、相互にかつ環境に応じて調和的に働かせること、③感情を人に通じる形で表現すること、④表現しなかったならば、部分的にあるいは全面的に無意識で終わったかも知れない諸種の精神的経験を人に通じる形で表現すること、⑤思想を必要な形で表現すること、をあげている。そして、教育は児童や成人に音響、像、運動、道具、器具の作り方を教えること、すなわち表現方

法の涵養であるとも定義している。

デュウイー<sup>2)</sup>もまた、芸術とは行為または製作の行程を表わすものであるとし、粘土を捏ね、大理石を刻み、青銅を鑄造し、絵具を塗り重ね、建物を築き、歌を唄い、楽器を奏で、舞台上で演技し、舞踊では律動運動をするなどの働きが芸術の中に含まれるとしている。そして芸術では、活動的または“行為的”側面が極めて顕著であると述べ、ジョン・スチュアート・ミルの、「芸術は表現に於ける完成への努力である」あるいは、マシュウー・アーノルドの「天衣無縫の純粋な技術」の言葉を引用している。

このように、芸術自体が、行為の側面を持ち、デュウイーが美的としてとりあげているところの鑑賞的、認識的、享受的経験において意味を持っているといえる。

では、芸術において技術として客観的に伝達し教えられるものは何であろうか。技術について、ハイデッカーは<sup>3)</sup>、「技術は露わに発くこと、従って真理が、生起する領域の中に存在している。」とし、芸術もまた、「真理を輝けるものの光の中へ出で―来たらす、露わな発きのひとつである\*2。」としている。また、S.K.ランガー<sup>4)</sup>も、「芸術は技術である。だがそれは、ある特別な目的、すなわち、表現形式、つまり、本然の人間感情を打ち出して、視覚、聴覚または想像力を通して知覚できる形式を創造することを目的とする技術である。」と述べている。一方、技術と芸術との相違について、L.マンフォード<sup>5)</sup>は、「芸術を技術から区別できる意味だけからいえば、芸術はまず何よりも個人の領域に係わるものであります。」「芸術とは、人間個性の十分な刻印をのこしているところの技術の一部であり、技術とは、機械過程を促すため人間性の大部分がそこから排除されてしまったところの芸術の表現である。」としている。

このように、表現形式としての芸術作品を創造する行為としての芸術は、人間個性を含んだ技術である。そしてこの行為は為すこと、すなわち経験においてひとつの意味を持つ。というのは、物質的素材（ダンスにおいては身体）が芸術という行為によって受ける変化と同様の変化が、内的素材にも行われ、内的素材は、作り直し、深められ、処理されるとするデュウイーの指摘のように、表現は混濁した感情を明瞭にするからである。リードがあげている教育的価値もここからみいだすことができる。

リードは、教育は表現方法の養成であるとし、作り方を教えることであるとしているが、この教えられるもの、技術として伝達し得るものは、マンフォードの言葉を借りれば、芸術から人間性の大部分を排除した部分としてとらえられる。この人間性、あるいは、個性、すなわち、技術を芸術たらしめ、作品を芸術的なものとしている条件について、デュウイーは、“愛”と“美的”をあげている。“愛”とは、手掛ける主題や内容に対する深い心やり、“美的”とは、享受し受容する認識のため形成されなければならないという芸術作品としての条件である。ハイデッカーにおいても、真実と美の中へ、出で―来たらすことを芸術としているが、美とは、人間性や個性の介在によって形成される領域と考えられる。そして、芸術という創造の行為から、人間性の大部分、あるいは、人間個性を取り除いた部分としての技術とは、外界より内面化されたイメージや感情や観念を外部化するための媒体の持つ一般的な表現原理である。つまり、技術は、各表現形式に固有な媒体の感情表出性としてとらえることができる。

ヴィグマン<sup>6)</sup>は、「舞踊はその意義が人の自然の動きの表現と関係があることを尊重して心に留めるときのみ理解できる」のであって、舞踊家のゼスチュアの基礎ともなる個人的な解釈の裏に、常に万人共通の意義があるとしているが、この万人共通の意義がすなわちダンス固有の媒体の持つ一般的な感情表出性である。つまり、ダンスにおける技術としては、ダンス固有の媒体である、身

体運動の持つ一般的な感情表出性をとり出すことができる。

## (2) 身体運動の技術としてのダンスにおける技術

ダンスにおける技術は、身体運動を媒体としたダイナミックイメージの一般的な表現原理であり、感情表出性を持つ身体運動の技術として考えることができる。

運動技術とは何かを論ずる中で小林一敏<sup>7)</sup>は、「技術とは、一定の目的を達するのによく適合するように定型化され、自動化された行動様式である。」「技術とは、客観的存在としてのいわゆる近代技術が個人の能力として立体化された(身についた)ものである。」という、技術教育の方面での定義をあげ、これが体育の教科にも通用するとする猪飼の見方をとりあげている。

ここに、技術に関するもうひとつの条件、「個人の能力として身についたもの」が加えられる。高部岩雄<sup>8)</sup>もその体育学原論において、「運動技術というものは、主体的に即したもの、身についたもの、という再認識する必要があるだろう。」と述べている。この「身についたもの」は、新修体育大辞典<sup>9)</sup>によると、技能として厳密な意味での技術と区別されている。小林は、運動技能を、「目的とする運動を達する能力」、運動技術を、「目的とする運動に必要な準備情報」として区別し、その関係を、「運動技能＝運動体力×運動調整力×運動技術」のようにとらえている。彼の論によると、運動技術は感覚的、科学的な運動の知識、運動調整力は練習の効果、そして運動体力は運動効果機構にあたる。

この運動技術のとらえ方から、ダンスにおける技術を再考察するなら、それは、媒体としての身体運動の持つ感情表出性に関する知識あるいは準備情報であるといえる。そして、ダンスにおける技術の明確化の問題は、身体運動の感情表出性に関する知識や情報となり得るものは何かを明らかにすることで具体的なものになる。

ダイナミックイメージの媒体としての身体運動の技術は、経験を通して技能として身につけ、個性の介在によって芸術としての意味を持つ。

## (3) ダンスにおける技術

小林の論における技術の流れの構造<sup>\*3)</sup>によると、運動状態(ダンスにおいては、ダイナミックイメージ)を認識し、表現するための第一段階としての要素への着目が準備情報としての技術を明らかにする。では、ダンスのための準備情報、及び、その要素とは何であろうか。それは、ダイナミックイメージの媒体としての身体運動の持つ感情表出性に関する知識であり、一般に動きの表現要因として把握されている。この要因についての論には、ダイナミックイメージそのものの要因を明確にしようとするものと、創作の方法を要因に分けているものがあるが、動きや構成における表現性という点では共通する見方が多い。

表①のA・Bは、教育におけるダンスの立場から、表現運動の構成要因をとらえたものであり、C・Dは芸術舞踊家が創作の立場からとらえた表現原理を教育現場に応用しようとしているものである。

表① 表現要因

A	B	C	D
水谷光 <sup>10</sup>	松本千代栄 <sup>11</sup>	五十嵐英子 <sup>12</sup>	江口隆哉 <sup>13</sup>
時間 空間 身体 集団	時間 形態性 (空間性) 力性	運動 リズム 空間 (表現)	表現運動 (七つの変化) 空間構成 時間構成
速度 アクセント リズム 方向 高さ 大きさ 進路 強さ ザイン 身体の面 動かす部位 人数 密度 対応	遅速 テンポ リズム 除々に急速に 時間的な配分 高移動 直線曲線 対称対立 距離置き 向強弱 アクセント 漸強(弱) 持続符 集団・ひとり 密集・分散 クライマックス	軸的な運動空間 移動を伴う空間運動 タイミング アクセント テンポ(スピード) 反復 タクト 高さ 面線 質 踊跡  舞踊身体育成法 空間形成法等、 邦正美の創作舞 踊の基本科目に よると思われる。 14 15	七つの変化身体の部分 向き 高・低 移動 アクセント タイミング テンポ 反復 タクト 空間(場) 舞体形 統一 調和 バランス クライマックス 変化

4者が共通にあげているのは、速度、高さ、移動、アクセントである。これらは、時性、形態性、空間性、力性の表現運動の構成要因にあてはめて考えることができ、身体運動の感情表出性に関する最も簡単で一般的な準備情報のひとつと言える。表現要因(表現運動の構成要因)は、単一の要因が持つ感情表出性から、それぞれの性質が係わりあった、より多様な感情表出性を持つ動きへと準備情報としての幅を広げる。この意味で、力性と時間性の係わりあいにおいてリズムをとらえ、力性と時間性及び空間性の要因の質の変化によるエフォート・アクションの考え方を展開している、V.プレストン<sup>16</sup>の論は注目できる。また、松本千代栄らによる、「動きの感情価」に関する研究<sup>\*\*</sup>も客観的で伝達可能な動きの感情表出性の探求として意味あるものと考えられる。

要因の係りあいは、さらにクリエイティブな方向へも、技術として具体化、客観化され得る可能性を持つ。すなわち、動きの感情表出性は、いわゆる創作法として、より多様で複雑な、あるいは深い感情表出性へと幅を広げる。このように、ダンスにおける技術として知識や情報となり得る一教え得る一ものは、身体運動の持つ感情表出性であり、表現要因と、表現要因の性質がイメージとして浮かびあがるための構成の一般的方法が含まれるといえる。

さて、松本千代栄<sup>17</sup>は、「創作するという独自の、特殊的な活動をはばみ規制することなく『教えうる一般的なもの』は何であろうか」として

①素材としての身体、その動きの改造

②媒体としての動きの感情表出性

をあげ、ダンス指導に際し探求しなければならないこととして指摘している。このうち②は、これまで論じてきたダンスにおける技術であるが、①の素材としての身体は、小林の論の中の運動体力にあたると考えられる。素材としての身体は、ダンスの準備情報としての技術を駆使するために無視できないものである。そして、素材としての身体やその動きの改造は、いわば素材づくりというさらにアンダーな時点での身体運動の技術であり、身体を表現の素材とするダンスに特有のものといえる。したがって、素材づくりの技術は、時としてダンスそのものの技術と混同され、特に体力面重視における体育の教材としてダンスを認めようとする際に前面に出された。ここで改めて、ダンスの意味が、その行為と、鑑賞的、認知的、享受的経験にあることと、ダンスの教育的価値も、媒体としての身体運動の経験にあることを確認しなければならない。

すなわち、ダンスの学習内容としては、素材づくりの技術と、媒体の表現性に関する技術が含まれるべきであるが、ダンスにおける技術は、媒体の表現性—身体運動の持つ感情表出性—に関する知識や情報であることを押える必要がある。

## II. ダンスの学習内容

### (1) ダンスの基礎

限定された授業時間内でのダンスの学習指導にとって「何を、どれ位、どの様な方法で習得させれば、ダンスの基礎といえるのか」は不可欠の問題である。そして、この問題はまず、「ダンスの基礎」を「ダンスの基礎的技能」と置き換えて考えることによって解決の手がかりを得る。すなわち、「ダンスの基礎」とは、ダンス創作のためにいつでも使うことができるように、最低限身につける必要のあるものととらえられる。

したがって、「ダンスの基礎」は、身体運動の技能のとらえ方より、

① 各表現要因とその様々な構成による一般的な感情表出性の知識や情報としての技術—媒体としての動きの知識

② 素材としての運動体力

③ 技術の体験や練習を通して得られる運動調整力—身体運動を媒体たらしめる運動調整力の相乗作用によって身につけられる。この中で、「ダンスの基礎」のために、教え得るものは、動きの感情表出性の一般的な知識や情報（表現要因及び、媒体の構成の方法すなわち創作方法に関する知識も含んだ）と、身体と身体運動の意識化や改造の方法である。そして、身につけられた技能は「踊る」「創る」「観る」の観点から理解され評価される。これらは、ダンスとしての総合的意味を持つ技能を、表現の媒体、表現の主体、表現の鑑賞者（主体をも含む）のそれぞれの角度から区別したものである。

身体運動の感情表出性は、常に素材（学習者の発達や学習段階、経験による運動体力等）を考慮しながら教えられるべきであるし、一方の身体や身体運動の改造も感情表出性と結びつけながら教えられ、「ダンスの基礎」として習得されなければならない。基礎的な技能は、「踊る」「創る」「観る」の総合的なものとして、学習者の年齢や経験によって指導の方法や技術の程度を考慮されたうえで、学習目標として掲げられる。そして、ダンスの技術は、ら線状を描きながら練習、習熟され、

技能としてダンス創作の際の拠りどころとなり得る。

したがって指導の問題は、この技術の習得のために、どれだけダンスとして「経験」をさせられるかにあるといえる。それは、習得させるべき表現要因にいかにして出合わせるかにかかっており、具体的には題材選択の問題として指導者にかかってくる。学習目標を含む題材による表現の経験を通して、基礎的技術は身につけられ、同時に学習者は個性の領域を拡大し、整理する機会を得る。指導者はこの題材によって、「あたかも教えていなかったように」教える。題材の選定は、指導法の前提として重要な問題である。題材は、表現要因を含むばかりでなく、身体や身体運動を意識化する機会も含んでいる。新しい題材によって、学習者は新しい表現性と新しい動きを経験する機会を得る。

このように、ダンスの学習内容としての、表現要因と素材づくりは、別々に学習されることもあるし、同一の題材の中に含まれることもある。しかも常に双方を含んだ、すなわち、ダンスとしての内容を持つものとして指導され学習される。

## (2) ダンスの段階的な学習内容

ダンスにおける技術はどのような段階をたどって技能として身につけられるのであろうか。

表②は、水谷光が、「生徒の実態に即した段階的な指導」の目標としているものと、中学生用準教科書に松本千代栄が学習のポイントとしてあげているもの（したがって指導目標ではないが）を抜き出したものである。

表②ダンス学習の段階による目標

水谷光 ダンス指導ハンドブック 大修館書店 1975		松本千代栄 竹之下休蔵・松田岩雄編 中学校体育実技 学研書籍株式会社	
初歩的段階	(1) リズミカルに動くことの楽しさを体得 (2) 感じのある動きができる (3) いろいろな題や内容をとらえてデッサンできる (4) グループで動く楽しさを体得する	表 し 方	題材の選択と動きの素描 リズミカルな動き (1) 動きのいろいろな性質と感じ (2) 反対要素を持つ動き
やや進んだ段階	(1) リズミカルな運動を連続して、フレーズで動ける (2) 感じのある動きを、フレーズで動ける (3) いろいろな題や内容をとらえて、内容にふさわしい動きのフレーズがつけられる (4) グループで対応した表現ができる	I  表 し 方	○簡単なまとまり  動きのフレーズ (1) 力の変化 (2) 反復と連続 (3) 動きのデザイン (4) フレーズの変化とまとまり
さらに進んだ段階	(1) 内容にふさわしくつくった動きのフレーズを変化・発展させる (2) つくったいくつかのフレーズをつなげて短い作品をつくれる (3) グループの学習が自主的に楽しくできる (4) グループ対グループで対応する動きができる (5) 作品を発表して見せ合い鑑賞ができる	II  表 し 方	○表現の中核にふさわしいフレーズを発展・全体として感じのこもった表現。
望ましい段階	(1) 作品創作の手順を知って、グループで自主的・計画的に学習を進め、楽しい作品が創れる (2) つくった作品にふさわしい伴奏音楽をくふうしてつけられる (3) 作品の発表会を開き、よい作品を鑑賞し、評価できる	III  表 し 方	作品創作 (1) 集団の変化とまとまり (2) 作品全体の変化とまとまり (3) 場の変化とまとまり 創作と手順 発表と鑑賞 ○クライマックス、統一のしかた、全体の性質（動きのはこび方）

両者共に、身体運動の感情表出性を中心に段階的な技能を整理しているが、技能の段階の最初には、「直観的にとらえ表わす」をあげている。そして次の段階では、「少し長さのあるものにする」さらに、「ただ長く続けられるだけでなく、変化をとらえ表現する」、最も進んだ段階では、「変化を、より表現性のあるまとまりとする」のようにとらえられている。これより、ダンスの段階的な学習目標と、学習内容となる技術を表③のように考えた。

表③段階的な学習目標と学習内容

学習の段階 (学習目標,技能)	学習内容としての 技術(身体運動の 感情表出性)	学習内容としての各表現要因の例			
		形態性	時間性	力性	空間性
とらえる 直観的 一時的	感じ デッサン 感じのある 動き,リズム カルな動き	形のみ 単発的な動き	瞬間的な動き 遅・速	強・弱	その場で
つづける	続け方 組み合わせ 感じのでの 長さ	続けて動く	続けて動く	強や弱を続ける	移動する 直線,曲線, 前後
変化させる	とらえ方 強調の仕方	いろいろな形 違う動き	だんだん速く だんだん遅く リズムの変化	漸強(弱) アクセントの 変化	直曲の組み合 わせ いろいろな方 向
まとめる	全体として感 じのこもった 表現 盛り上がり とまとまり	感じが出るよ うに組合せる 効果的な変化 とまとまり	効果的な速度 の変化 必要な長さ にまとめられる	クライマック スとまとまり	効果的な場の 使い方

各表現要因については、それぞれの段階で考えられる取り扱いの例を示したが、これらは単独で経験させることはほとんどなく、他の要因との係わりあいによってその性質を教え、情報として与えることになる。その際、一方の要因の性質を同じものにしておきながら他方の要因を変化させることによって、変えた方の要因の持つ感情表出性をきわだたせる。

### (3) ダンスの学年別学習内容

ダンスの基礎的技能は、各学年でどの程度押えられたらよいであろうか。

表④は、実際に行われている授業が、学年によってどのような学習目標を持っているかを、過去10年間の体育関係の雑誌等<sup>18)</sup>からぬき出したものである。(学年区分は、小学校低学年、中学年、高





表⑥ 過去10年間の資料における学習内容（準備情報としての技術）

資料	時間性		空間性	形態性	力性	動き方	感じ	変化	デッサン	フリーズ	中内容	くり返し	盛り上がり	まとめ	話の筋	グループ	その他
	リズム	その他															
低学年	1	○					○	○									
	2	○	○														
	3	○	○					○									
	4																
	5				○		○										
	6	○	○	○			○		○						○		
	7	○	○	○			○	○	○								
	8	○		○			○										
	9	○	○	○					○								
	10	○	○		○				○								
	11																○
	12		○	○					○							○	
	13	○														○	
	14		○	○			○		○								
	15																
中学年	16						○										
	17	○	○	○	○	○		○									
	18			○				○									
	19	○	○		○	○									○	○	
	20	○	○	○	○											○	
	21	○		○									○				
	22								○				○				
	23		○	○		○	○										
高校年	24	○		○	○	○	○	○		○							○
	25	○	○	○	○	○											
	26			○		○											
	27						○			○			○	○			
	28	○	○	○	○	○	○	○									
	29			○			○										
	30	○	○			○	○	○					○				
	31	○		○			○		○	○			○		○		
	32			○	○			○	○								○
	33	○		○													○
中学校	34	○	○	○	○	○	○				○	○					○
	35	○	○	○		○		○			○						
	36	○	○	○		○											
	37																
	38	○	○	○	○				○								
	39	○	○	○		○	○	○		○			○	○	○	○	
	40	○						○					○				
	41	○	○	○	○		○	○		○			○				○
	42	○		○			○	○									
	43	○	○	○	○	○											
	44	○	○	○		○								○			○
	45																
高校	46		○	○	○	○	○	○	○	○			○		○		
	47		○	○			○	○									
	48		○	○	○	○	○		○								バレエの基礎
	49	○	○	○	○		○			○							
	50						○										
	51	○	○	○	○	○	○										
	52																○
									○		○						○
小計	15	9	8	6	2	0	4	2	8	0	0	0	1	2	1		
中計	8	4	4	5	3	3	2	1	3	0	0	2	0	1	2		
高計	9	5	3	7	3	4	6	4	2	3	0	3	1	1	2		
中計	11	11	11	13	6	7	7	5	5	3	3	5	2	2	5		
高計	4	2	2	2	2	1	2	1	1	1	1	0	0	0	2		
合計	12	31	28	33	16	15	21	13	21	6	7	4	10	4	6	12	

学年、中学校、高等学校とした。数字は、各項目を目標としてあげている指導者の人数である。)この内容を、題材、創る技能、踊る技能、観る技能、集団の技能、態度の6項目に分け、段階別に見ると表⑤のようになる。また、前項(表③)の学習の段階と合わせて考えると、低学年では直観的あるいは一時的にとらえる段階、中学年は続ける、高学年では変化させる、中・高では全体の変化とまとまりをつける段階のようにあてはまる。

さらに、技能習得のために、客観的な情報として与えられている技術を同一資料より拾い出したものが表⑥である。このうちリズムは、「リズムカルな動き」や、「動きのリズム」などの形で各学年共多くとりあげられているので特にぬき出し記入した。すなわちリズムは、ダンスの基本的、本質的なものとして扱われていることがわかる。

また、リズムと同じように変化についても低学年から高等学校まで全段階で教えられている。したがって、変化についての知識は、ダンス本来の性質であるリズムと並んで、感情表出および構成の最初の要因として教えられるべきものであり、その後も押えられるべき技能とされていると言える。

表全体をみると、低学年では学習内容として、表現要因のみがとりあげられているのに対し、高学年からは、フレーズの知識が教えられ、より大きなまとまりのある動きの感情表出性の情報が与えられる傾向があることがわかる。これは、先に考察した学習の段階と一致する。

一方、表現要因では、力性のみが低学年では全くとりあげられていない。これは、「力」の概念は低学年では理解困難であり、情報となり得ないと考えられているためと思われる。このことから、筆者が大学生を対象に実施した授業<sup>5</sup>で、「手がかり」として与えた力性は、大学生にとっては有効な情報となったが、小学校低学年に対して有効な情報となり得るかどうか確かめる必要があることがわかる。しかし、力性はリズムと関連して重要な要因であり、取り扱い方によっては低学年にとっても充分有効な情報になり得ると考えられる。

また、表には一括して記入したが、時間性については、低学年では、「速い—遅い」の性質のみが教えられている。これは、第一段階の技能が、「直観的、一時的にとらえる」と考えられることから妥当と言えるが、時間性のうちで最も初めに教えられるべき性質が、「速い—遅い」であると言えることもできる。

以上より、各学年で学習される技術として表⑦のようにまとめることができる。

表⑦ 各学年における技術

			○-----	中核・盛り上がり・まとまり
		フレーズ		
変化				
	○-----	力性		
時間性	(遅速)(長・短) (リズム)(連続)	(くり返し)		
空間性				
形態性				
低 学 年	中 学 年	高 学 年	中 学 校	高 等 学 校

これらの技術が技能として身につくために適切な経験がなされなければならないが、それには、先にも論じたように、指導者は目標とする技能のための情報や知識を含む題材を選択して与える必要がある。特に、発達の特性をもち興味のあるものが拡大していく小学生にとっては題材は充分考慮して与えられなければならない。すなわち、どのような題材を与えたらどのような体験をさせられるかが重要な問題である。

題材は、表現原理を内包し、学習者の心を刺激し、表現媒体としての動きを体験できるものでなくてはならない。題材は、発達、興味、地域、社会、個性、時代等の特性と、教える技術によって選択されなければならない。これと関連して、小学校におけるダンス学習で、題材のもつ状態や情景、感じがそのままねらいとして掲げられることが多くある\*。

### おわりに

ダンスにおける技術を、媒体としての身体運動の持つ感情表出性において考察し、学習内容具体化の手がかりとして表現要因とそれを含んだ題材をあげてきた。各学年、各段階で学習されるべき技術を含んだ題材のより具体的な選択と例示は今後の課題である。しかし、どの題材も、取り扱いの方向により、多様な技術指導の可能性を持つものである。押えられるべきことは、どのような技術を学ばせるか、すなわち、どのような表現を経験させ、どのような表現要因に気付かせるのかが明確であることである。

表現要因の中で時間性と力性に係わっており、各学年で取りあげられているリズムは、ダンスの本質とされているが、ハイデッカーの述べるような露わに発くものを、感情からさらにそれに内在するリズムに求めるとき、学習内容はさらに明確になる。すなわち、ダンスは、外的あるいは内的素材のもつリズムを露わに発く行為であるとするなら様々なリズムの経験がダンスの本質に近づくことである。事実、学習の場において、指導技術としてのリズム言葉は子どもの伸び伸びとした表現を引き出している。また、主観的な感想ではあるが、大学生を対象にした指導においても、「リズムの特徴をつかんで」という手がかりによって、明確な対象把握と表現活動が可能になった。さらに、「力性の変化」を学習目標とした学習では、一回目と二回目の作品にリズムの変化が顕著に見られたが、それは、力性がリズムの大きな要因のひとつであることと、その変化によって感情表出性に違いがあることを体験させることができたためと考えられる。

過去、学校におけるダンスに与えられてきたリズムという名称、あるいは、いろいろな場面に強調されたリズムカルという言葉も、もう一度謙虚に受けとめ考えなおさねばならない。そして、ダンスの学習内容具体化のために、リズムに関して、感情表出性と結びつけた研究が必要であると考える。

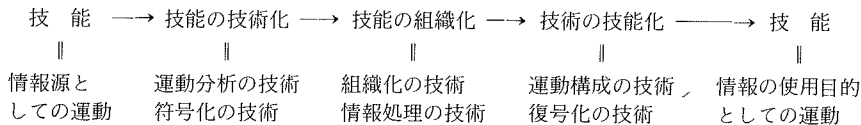
### 参考文献

- 1) ハーバート・リード 芸術による教育 美術出版社 1953
- 2) ジョン・デューイー 経験としての芸術 春秋社 1952
- 3) ハイデッカー 技術論 理想社 1965
- 4) S.K.ランガー 芸術とは何か 岩波書店 1967 p.135

- 5) L.マンフォード 芸術と技術 岩波書店 1954
- 6) マリー・ヴィグマン 舞踊の表現 大修館書店 1976 p.8
- 7) 小林一敏 運動技術とは何か 学校体育 第22巻第3号 日本体育社 1969 p.11
- 8) 高部岩雄 体育学原論 新体育学講座 第25巻 道遙書院 1962 p.44
- 9) 新修体育大辞典 不味堂 1976
- 10) 水谷光 ダンス指導ハンドブック 大修館書店 1975
- 11) 松本千代栄 中学校体育実技 学研書籍株式会社
- 12) 五十嵐英子 ダンス技術形成のポイント 学校体育 第21巻第7号 p.52 1968
- 13) 江口隆哉 舞踊創作法 カワイ楽譜 1961
- 14) 渡辺江津 新訂舞踊創作の理論と実際 明治図書 1974
- 15) 邦 正美 舞踊概説 京都学校舞踊研究会 1948
- 16) V.プレストン モダンダンスのシステム 大修館書店 1976 p.71
- 17) 松本千代栄 ダンスの技術構造—創作の立場から 体育科教育 第17巻第8号 1969
- 18) 新体育 第37巻～第46巻  
 学校体育 第20巻～第29巻  
 体育の科学 第17巻～第26巻  
 体育科教育 第15巻～第24巻  
 女子体育 第9巻～第18巻  
 全国女子体育研究大会紀要 6.7.8.9回

## 註

- \* 1. 松本氏によれば、舞踊の本質とはリズムカルな動きであり、これは生命現象を増幅するものである。生命現象の原理を体感させるのが舞踊である。生命体の持つリズムそのものを目的としている点で、他のスポーツと異なる教育的価値を持つのが舞踊である。
- \* 2. 技術(Technik)の言葉は、técnēに属することがらを意味する。このテクネーは2つの意義、1つは、出で——来たらすこと、すなわち、ポイエシスに属し、もう1つの重要なことは、認識や熟達を意味している。それは露わに発くひとつのありかたである。そしてかつては、芸術もテクネーなる単なる名をもっており、唯一無双にして多様な露わな発きであった。(技術論p.60)
- \* 3. 小林一敏によれば技術は一般に次のような段階を経過して技能形成に利用される。



小林一敏 運動の技術とは何か 学校体育 1969 22巻3号 p.14

- \* 4. 「動きの感情価に関する研究」松本、川口、東京教育大学体育学部紀要 1972  
 みえにおける舞踊運動の表現性について、感情類型を明らかにしようとしている。
- \* 5. 大学生を対象に、「力性の変化」を手がかりに進めたダンス学習では、「踊る」技能や、「観る」技能についてはある程度成果があたり、ダンスの導入として「力性」は良い情報となり得ることがわかった。  
 ダンス学習に関する研究 1977.10.8 舞踊学会発表
- \* 6. 過去のダンス学習指導のねらいをみると、小学校では、題材による様々な表現の経験が中心になっており、中学校では、ダンスの技能を高めるための表現技能の習得がねらいとしてとりあげられている。  
 ダンス学習に関する研究